

# 図書館だより

Library News No.54  
Nara National College of Technology

2002年 2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



3 I 青山 瑠美さん

## 目 次

巻頭言「私の読書」.....	2	英英辞典を利用していますか.....	13
読書感想文コンクールを終えて.....	3	学生の広場.....	14
入選作品紹介.....	5	最近の書棚から.....	15

ここでは、私の読書に関連したエピソードを二つ紹介してみたいと思います。いずれも、高専生や大学生の頃の経験です。

まず一つ目は、授業で初めて英語の原書を訳しながら、新しい知識を得る練習をはじめた頃のエピソードです。原書は「Theory of Elasticity」(弾性学)という機械工学の分野では比較的有名な本でした。授業を受ける人数が少なかったため、3週か4週に1度の割合で、一つの節を他の学生の前で説明する、輪講形式の授業でした。どの学生も予習にかなり時間をかけ準備したのですが、担当されていた先生の質問に立ち往生して、いつもしどろもどろでした。その時に先生がよく言われた「行間を読め」という言葉が今も印象に残っています。行間は真っ白なので、何を言っているのかと思われるかもしれません。詳しく意味を説明された記憶はありませんが、私は次の様に解釈しています。原書や外国語の論文(以下、洋文献)を読む時、きれいに和訳しても十分ではなく、書いた作者が何を言いたいのか、その意図を読取れと言うことです。洋文献をわざわざ読むのは、自分が十分に知悉している領域ではないことが普通ですから、作者の意図を読取るには、その文献と関連する領域を別に勉強するか、あるいは実際に体験することが必要であると思います。このことは、洋文献のみならず和文献についても同様であると考えられます。教科書が良い例ではないでしょうか。教科書に書かれている内容を読むだけで、私達は内容が判ったような気がしますが、その様な学習のみでテストを受けると、全然出来ないでしょう。式の誘導や原理の理解は実際に体験してみないと、何時でも利用できるものとはならないと思います。

二つ目のエピソードです。私は読書が好きです。ところで、本を読むことは、自分の知らない知識を得るためであると考えている人が多いのではないのでしょうか。私もかつてその様に考えていました。以下は友人に教えられたことです。人は本を読むことで知識を新しく得た様に思っていますが、本に書かれている内容が既に持っている知識とはまったく異なった概念で形成されているとすれば、人はその内容を理解できないと思いませんか。一つ目のエピソードと関連して、本を読むことで得た知識は、大抵既に自分自身で持っている概念を下に理解されるのだと考えています。それでは、人はどうやって新たな概念を採り入れ進歩するのでしょうか。生まれてから、生活する内に、人は色々な知識や考えを進歩させますが、これを直接に助けるのは、他の人との会話や自分自身の実体験にあると考えています。自分の理解できない概念を、人は会話や体験の中で知らず知らずの内に吸収しているのだと思います。この観点から読書は、自己の外から得た新たな概念を補強し発展させるのを助けるものではないのでしょうか。



平成13年度

# 読書感想文コンクールを終わって

図書館委員会

第26回読書感想文コンクールの審査結果を発表します。図書館委員会と国語科教官による審査をへて、応募総数338編の中から、次の優秀作9編が入選となりました。所属学科・学年・氏名とともに、以下に記して、その栄誉をたたえたいと思います。

## 優 秀

電子制御工学科1年	森井 保宏	「田宮模型の仕事」を読んで
情報工学科1年	岡田 尚子	「12番目の天使」を読んで
化学工学科1年	藤井 敦	「獣」
化学工学科1年	山口 亜季	「沈黙の春」を読んで
機械工学科2年	松村 草太	「金子みすず童謡集 明るいほうへ」を読んで
機械工学科2年	浅川 志郎	「路面電車 - 未来都市交通への提言」を読んで
電子制御工学科2年	大西 恵弓	「チョコレート革命」を読んで
情報工学科2	小西 郁江	「チーズはどこへ消えた？」を読んで
化学工学科2年	大山 恵奈	「愛、深き淵より」を読んで

また、惜しくも入選とはなりませんでしたが、審査の過程で先生方に高い評価を受け、最終選考まで残ったのは、以下に名前をあげる人たちの作品です。

1 M 中野 皓太	1 M 吉川 清孝	1 E 恩地 秀幸	1 E 國弘 幸佑
1 E 弓場 央嗣	1 S 大畑 朋也	1 S 竹崎 友哉	1 S 林 公造
1 千代 真広	1 豊永 侑子	1 野村明日香	1 宮崎 珠季
1 C 瀬戸山朋子	1 C 高木 謙	2 M 中島 和美	2 M 山本 剛
2 E 隠地 勇樹	2 E 栗巢 省吾	2 S 竹井 英行	2 S 溝辺 宜之
2 S 田中 丈久	2 I 大倉 伸広	2 I 矢追 真	2 C 前川 佳史
3 S 田中 淳也			

以下、恒例にしたがい、入選作についてコメントします。まずは1年生から。

森井保宏君の作品は、何と言っても「愛」に満ちています。最初の短い段落で、その本との運命的な出会いを「わかるものにはわかる」式に熱くマニアックに描きながら、しかしその本がどういう内容の本であるかは「だれにでもわかる」ように簡潔に記して、読者を自分の「愛」の世界に引き込んでいきます。やはり、文章は出だしが肝心。それから僕たちは、模型会社の田宮が、じつは製材屋から出発し、紆余曲折を経ながらも、田宮俊作氏の「模型へのこだわり、情熱」「チャレンジ精神」に支えられて、「世界の」タミヤへと成長していく姿を、森井君の「本気」とともに辿ることになります。これが実に楽しい。正直なところ、田宮さんにはあまり興味がないけれど、森井君の「愛」に満ちた文章をあっという間に読み終えてしまうのは、なんとも惜しい気持ちになりました。

岡田尚子さんの場合、原稿を一目見て、お、字がきれい。もうこれだけで嬉しくなってしまう。でも字がきれいということが、いつでも有利かというと、じつはそうでもない。その外見の良さに見

合った内容を求められてしまうから。岡田さんの文章は、しかしその期待を裏切らない。「12番目の天使」のあらすじ紹介は要を得てしかも簡。単にとりこぼしが無いというのではない。主題に関わる次の文章展開に向けて、大事な部分はちゃんと伏せられている。自分の幼い命がやがて終わることを知りながら、それでもティモシーは最後まで希望を捨てることがない。「毎日、毎日、あらゆる面で僕は良くなっている！」「絶対、絶対、絶対、あきらめるな！」という二つの言葉で自分を支え続ける少年を岡田さんは心から応援します。そして彼女はまた逆にティモシーから応援をうけることとなります。僕は僕の娘にもこの本を読んでほしいと思いました。

藤井敦君の作品は、大変に恐ろしい。「人という生き物の中に、獣がいる」。彼の洞察は、もちろん恐ろしいけれど、獣性という人間性の深部をえぐった小説のいちばん大切な部分から少しも目をそらすことなく、しっかり見据えてたじろがない藤井君の文章は、僕たちを安心させてもくれるのです。言葉こそが人間の獣性からもっとも遠いところにあるものだからでしょうか。

山口亜季さんは、化学を専攻する学生にふさわしい本を取りあげました。すでに現代社会に不可欠なものとなってしまった化学の力とその力がもたらす環境破壊などの負の側面を指摘し、それを単なる技術的な問題としてだけでなく、倫理的問題としてもきびしく追及しています。カーソンは今から約40年前の1962年に「沈黙の春」を出版し、有機化合物による環境汚染を告発しましたが、私たちの社会は十分に彼女の警告に答えているとは言えない、と山口さんは静かな怒りをもって訴えかけています。

さて、2年生の作品ですが、残念ながら与えられた紙数をすでにオーバーしているようです。じつは僕は審査の時、投票において自分に許された持ち点のすべてを2年生の作品に入れました。つまり僕は上にあげた1年生の優秀な作品より2年生の作品のほうがさらに良いと判断したのです。その事実を明らかにすることで2年生作品の講評に代えたいと思います。皆さん、すばらしい作品をありがとう。

(国語科：武田)



受賞された皆さん(校長室にて)

## 読書感想文優秀作品の紹介

田宮俊作 著

### 「田宮模型の仕事」を読んで

15 森井 保宏

僕がこの本と出会ったのは、今から一年ほど前のことだ。ぶらりと寄った書店で、見慣れた星のマークを発見した。僕のような模型を趣味とする者なら、必ず反応してしまうマーク。それは紛れもなく、かの有名な田宮模型のトレードマークだった。そして、星のマークで表紙を飾ったこの本は、田宮模型の社長である田宮俊作氏が綴る、涙と笑いの奮戦記である。

「タミヤ」と聞いて多くの人がまず思い浮かべるのは、おそらくミニ四駆であろう。高専で学ぶ人なら、ほぼ間違いなく遊んだ記憶があるのではなかろうか。その他にも「博物館収蔵品」と呼ばれる、ハイクオリティーなスケールモデルなど、多くのヒット商品を生み出している。田宮模型は今や世界的な大企業である。しかし、今日までの道のりは決して平坦なものではなかったのだ。タミヤを世界一の模型メーカーにしたものが何なのか、この本によって知ることができた。

田宮模型の前身は、何と製材屋だったそうだ。そしてその余り木を使って木製模型を作ったのが始まりのようだ。それが戦後間もない頃の話なのだが、数年の後に日本にもプラスチック原料という物が入ってくる。ブリキのバケツやセルロイドの人形は次々と姿を消し、プラスチック製品へと変わっていった時代である。模型の世界も例外ではなく、木製模型はプラモデルにシェアを奪われ始めていた。多くの木製模型メーカーがプラモデルに転向する中で、火災事故などで多額の借金を抱えていた田宮模型は、イニシャルコストのかかるプラモデルにはなかなか手を出せなかったという。そしてやっとの思いで出した「戦艦武蔵」は大赤字、という具合で失敗続きだった。そんな苦しい状況の中、タミヤを支えた原動力は俊作氏の「本気」、すなわち模型へのこだわり、情熱なの

ではないかと思う。それを象徴するようなエピソードも綴られていた。

冷戦の最中、タミヤにはどうしても模型化できない物があった。それは、旧東側、すなわちソ連製の戦車である。どうしても資料が欲しい俊作氏は、何と冷戦下にもかかわらずソ連大使館に直談判。断られるやいなや、今度は中東戦争の当事国イスラエルに飛び、アラブ連合から鹵獲したソ連製戦車を取材したという。

また、こんなこともあった。極限までリアルな自動車模型を作るため、俊作氏は本物のボルシェを購入し、あろうことか自宅のガレージで完全に分解してしまったそうだ。戦車の資料のために戦場へ行き、車のプラモデルのために本物の高級車をも犠牲にする。とても並の根性ではできないことだ。特に前者などは命賭けである。本当に好きでやっていなければ、ここまでやるのは無理だろう。

また、俊作氏の何者にも屈しない、チャレンジ精神には脱帽である。例え困難に出会っても、それをバネにより高いハードルを越えてこられた。初の電動RCカーや、例のソ連戦車の模型などが好例だろう。そして新しいチャレンジは現在も、そしてこれからも終わることなく続いていくのだ。

ある人がこんなことを書いていた。「コココーラの看板がある店を見つけたとしても、それはキオスクかもしれないし、レストランかもしれない。しかし、あの星のマークのある店なら、一目で模型店だと分かる。このロゴはもはやタミヤ社のロゴではなく、模型界そのもののシンボルなのだ」と。僕も正にその通りだと思う。そして、そんな成功を勝ち取った人は、どこかで人一倍の苦勞をしているということも忘れてはならない。小さなキットの一つ一つに、タミヤの「本気」が詰まっていることを、この本は教えてくれたのだ。



オグ・マンディーノ 著

## 「12番目の天使」を読んで

1 I 岡田 尚子

この小説の内容は、主人公であるジョン・ハーディングという勉強、野球においてとても優秀で、若くしてコンピュータ業界最大の会社の社長を務め、また大学生の頃には大学野球の全米代表にもなった男が故郷の小さな町で家族三人で幸せに暮らしていた。しかしある日車の衝突事故によって最愛の妻サリーと一人息子でまだ七歳のリックを亡くしてしまった。生きる目的を見失い、絶望の淵に立たされたジョンは護身用に持っていたピストルで自殺しようとした。その時、ジョンの幼い頃からの親友であるビル・ウェストが訪ねてきた。ジョンが今にも死のうとしていたことなど知らないビルはジョンにリトルリーグのチームの監督をやってくれないかと頼んできた。そのチームの名前は偶然にもジョンがリトルリーグをしていた時のチームの名前と同じ、エンジェルズだった。

しかしそんな気にはなれないジョンはその依頼を断ろうとするが、そのチームでもう一度生きようという気力や勇気を与えてくれる少年に出会う。その少年、ティモシー・ノーブルは十一歳の割に体格が小さく、その上まわりの選手よりも守備・打撃・走塁の三つにおいてずば抜けて下手だったが、彼はどんな時も常に前向きに希望をもって生きていた、という話だった。

私は最初、監督になってからも毎日毎日銃を眺め、家族の死をひきずっているジョンを好きになれなかった。同情もあまりなかった。つらいかもしれないがどうして家族の死という現実を受け入れ、その家族の分までしっかり生きていこうと思わないのかとイライラした。ビルや他の多くの人に支えられているのと思った。でもそれは私が本当に大切な人を亡くしたことがないからかもしれない。

ティモシーはどの試合でも全くヒットが打てなかったが、ある二つの言葉を毎日言い続けてがんばっている場面はすごく印象的だった。その二つの言葉とは「毎日、毎日、あらゆる面で僕は良く

なっている！」と「絶対、絶対、あきらめるな！」だった。ティモシーが常に希望をもっていられるのはこの言葉のおかげでもあるが、やっぱり一番にティモシーの強さだと思う。自分が打てなくても、チームの人に「あきらめるな！」と応援し続け、いつのまにかチームの全員が「あきらめるな！」と合唱しだしたことや、どの試合でも全く打てなかったのに監督やチームメイトや多くのお客さんにまで応援されて、決勝戦で初ヒットを打ったことは本当に感動した。

でもティモシーの本当の強さを知ったのはこの後だった。実はティモシーは脳腫瘍で十一歳か十二歳までしか生きられない状態だった。しかも本人はその事を母に告げられて知っていた。なのに、いつもくったくの笑顔でチームメイトを応援し、必死に、でも楽しんで野球をしていたのだ。私とその立場なら絶対そんなことはできないだろう。自分がそんな状態なのにまわりの人々に勇気や希望を与え続けたティモシーは本当に天使のようだったと思った。そしてその天使に出会えたジョンもまたすばらしい人間だったからこそ救われたのではないかと思う。

この本を読んで、私もティモシーのように強く、明るく、まわりの人のことを考えられるような人になりたいと思った。また、落ち込むようなことがあれば、あの二つの言葉を思い出してみようと思う。



## 「獣」を読んで

1 C 藤井 敦

「獣」、この物語には幾度となく、この言葉が登場する。はじめは、孤島に生息する野獣としてのことだった。しかし、読んでいくにつれてその意味がだんだん別の意味に変わっていくような気がした。

まずこの物語は、珊瑚礁の中の孤島に、少年たちの乗った飛行機が不時着したところから始まった。彼らは島で生き抜き救助を求めるために、リーダーを決め、役割を決めている。大人のいない世界、大いなる自然を楽しみながら暮らしていく。最初は、楽しく、ロマンにあふれた物語だと思っていた。しかし、この物語が進んでいくにつれて、この物語は、残酷へと変わっていく。少年たちの平和な生活は、長くは続かない。彼らは内部対立から敵対し、やがては殺戮という狂気の世界に踏み込んでいくのだ。彼らは、どうして平和な暮らしが続けられなかったのだろうか。僕はこのストーリーに大きな衝撃を受けた。そしてこの物語の放つ奇妙な雰囲気目が離せなかった。もしかするとこの奇妙な雰囲気の根源が「獣」なのかも知れない。

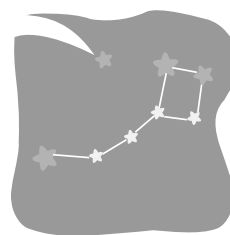
やがて、敵対した一方の少年達は、豚を殺し血を流すことに快感を感じる「野蛮人」となるのだった。彼らが次第に人間でない、まさに「獣」へとなっていくのが手にとるようになっていった。そして、まだ「人間」としての理性を保つ少年達は、その「獣」たちに殺されるのである。

ピギーという理性的な少年が殺された時、僕には様々な思いが混ざり、自分でもよくわからないようになった。ピギーに対する哀れみ、「野蛮人」たちの行為への純粋な怒り、その「野蛮人」たちの行為への疑問など。

少年たちの中に、人の中に、自分の中にその「獣」が棲んでいて、それがむき出しになるという光景。僕は見てはいけないものを見てしまったような思いがした。そして人間という生き物の中に確実に「獣」がいることを知った。その「獣」はその野蛮人たる少年の中だけに存在しているのではないと思う。理性的な少年たちにも、大人た

ちにも、もちろん僕にも、およそ人間という生き物の中には、必ずその「獣」が巣食っている。僕たちは、人間はいつもその「獣」、つまり悪を否定し続けているのではないか。人を殺すことに喜びさえ感じるように人を変えてしまったこの「獣」を。

この物語は、この物語の中を通して世界中の人々に何かを訴えているような気がしてならない。だから理解し、決して忘れてはならない。僕らはいつも「獣」と共存していることを。



レイチェル・カーソン 著

## 「沈黙の春」を読んで

1 C 山口 亜季

「沈黙の春」を読んでいて、途中で私は人間の愚かさに呆れてしまった。「いったい何のために、こんな危険をおかしているのか、みんな気が狂ってしまったのではないかと未来の人々は現代を振り返ってみて、いたぶるかもしれない、」とカーソンは書いているが、全くその通りだと思った。この現代では、あまりにも無謀な化学薬品の撒布により、たくさんの生命を奪い、自然を破壊することはないだろう。しかし過去の話とはいえ、何も考えずにはいられなかった。その原因は違うが、現代でも自然破壊は止まっていないのだから。

化学の力は、現代の生活において不可欠なものだ。今、自分の周りを見回せば、ほとんどの物に化学の力が使われている。化学の力はとても便利なものである。しかしその力も、使い方によれば恐ろしいものになってしまう。害虫駆除のために化学薬品をむやみにばらまく。上手くいけば害虫の数は減るが、それは単なる一時しのぎでしかなく、本当に問題は解決しない。それどころか更に状況は悪化する。川、地下水、食物連鎖など、様々なルートを通して自然は汚染され、破壊され

ていく。あらゆる動物の生命が奪われ、反対に問題となっていたはずの害虫が爆発的に増加する。そして、最後には全て人間に返ってきて、中毒症状に陥って急死したり、癌になったりもする。

私は、便利な化学の力も使い方によれば大変なことになってしまう、ということは分かっていた。しかし、これほどまでに恐ろしいとは知らず、読み進めるたびに衝撃の連続だった。同時に、なぜ、状況が悪化するだけなのに化学薬品をばらまくのだろう、とつくづく思った。害虫駆除、邪魔な植物の除去は決して悪いことではないと思うが、他の良い方法はなかったのだろうか、と思った。

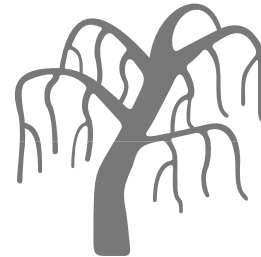
ところがその通り、周りの自然や動物に危害をあたえない良い方法があったのだ。邪魔な植物の除去の場合、その植物だけに薬品をスプレーしたり、その植物を食べる虫を放ったりすればよい。害虫駆除の場合、天敵の虫を放ったり、その害虫を殺す作用のある植物を植えたりすればよい。では、こんな安全な方法があったのに、なぜわざわざ危険なことをしていたのだろうかと思った。

原因は薬品の危険性が目に見えているのに、それを否定する人達がいたことと、人々がその危険性と他の方法もあることを知らなかったからだ。私は危険性を分かっていたのに、人々にその事実を伝えようとしなかった人達が本当に許せない。

しかし、こういう人達が一番悪いと思うが、人々にもいけなかったところがあると思う。自分の行動が地球にどんな影響を与えるのかとか、環境の事などについて、何も考えていない人が多かったのではないだろうか。こういう事に興味を持ち、事実を知ろうとしていなかったのではないだろうか。一度破壊されてしまった自然は、そう簡単には元の状態に戻せはしない...というより、ほぼ不可能である。それなのに、何が起こるのか全く考えずに、薬品をむやみに使った後で「知らなかった」では済まないと思う。常に地球の自然や環境に関心を持ち、自分の行動が地球にどのような影響を与えるのか考え、知っていこうとする姿勢が必要なのではないか、と思う。

無謀な化学薬品の撒布による自然破壊はないとしても、いつ化学の力の使い方を誤って、大変な

ことになるかわからないし、自然破壊が止まらないのは現代も変わっていない。これから、私は化学を学んでいくのだから、私は化学の力の恐ろしい面も忘れず、常に環境問題に関心を持つようにしたい。また、地球があり、自然があり、他の動物がいるからこそ人間は生きていける、ということ絶対に忘れずに、自然や他の動物を大切にしようという気持ちを常に持っていきたい。



## 「金子みすず童謡集 明るいほうへ」 を読んで

2 M 松村 草太

僕は、金子みすずという人の詩を見たのは初めてだった。明治三十六年に生まれ、二十六歳で自殺したそう。そして、天才詩人として注目をあつめたのは、それから五十余年経ってからというからびっくりした。しかし、天才詩人と呼ばれただけあって、普段、本を読んでいない僕でも、この本の詩の世界に入っていって、気がついたら夜の二時だ三時だということになったほどだ。詩の中には、書いた人の独創性とか性格とかがはっきりでていて、そういった要因で詩は面白かったり、又はくだらなかつたりすると僕は思う。

数学のように公式にとらわれず社会の常識にもとらわれないみすずの詩は、夏休みボーッと暮らしていた僕の中で新鮮な感じがした。なにか活力みたいな物をもらえたように感じ、やっぱり天才と呼ばれるのは、人に口でじゃなくて、文字でも気持ちや感情を吹き込むことができる人に使うんだなーと思いました。そして、僕が一番に感じとれたのは、金子みすずの詩は人間だけでなく他の全ての生き物にやさしいということです。そして、



何より知的な考え方をしています。例えば、金子みすず本人が花となって、自分ならこうする、ああするといったように感情を移入して、詩にしています。こういうのを僕は知的だなーと思いました。そして、こういう感情移入に、僕も「そうそう」とうなずきながら共感できることに喜んでいました。

しかし、この本を読み終えてみれば、僕の感情などは、ちっぽけなもので、彼女はもっと多彩な感情をもっていました。しかも、大人の自分から花などに感情移入するのではなくて大人の自分から次に子供の自分となってから花などに感情移入していました。子供のように何に対しても素直に、新鮮に感じ、そして、子供の直感で書いているように思いました。童謡ならば、当たり前のことかもしれないのに、それが際立って感じられました。僕は嫌でも日頃、大人の常識というやつを学ぶことになっています。

しかし、みすずの童謡では子供の視点から、子供の直感が、大人の常識を吹き飛ばしてしまう力を（この本から）強烈に感じてしまいました。そして、そこに実に様々な新しい世界を繰り広げています。常識を学んでいる際の僕には、眩しいばかりです。だから、僕は何事にも一つに囚われない広い視点で生活していきたいと思いました。それから、この読書感想文をしている時に、ちょうど4チャンネルで、金子みすずの再現ドラマのようなものをしていました。金子みすずの役をやっていたのは、松たかこさんで、とても感じがでていたと思います。けれど、実際の金子みすずを見たことなどあるはずがなかったのでただの想像ですが、ドラマでやっていたのは、僕が想像していたよりも、もっと明るくて元気で思いやりのある人でした。てっきり僕は、金子みすずという人は陰気な感じを受けていました。なぜかという、二十六歳で自殺という終わり方を告げていたし、詩人と聞くと何となく、人との交流が少なく自分の中の世界を生きる人だと思っていたからです。しかし、そんな誤解を本という言葉だけの世界で決めつけてはいけなかった。だから、この、ドラマを見て、本当によかったし、日本中がこの金子み

すずという人の存在を知り、詩を読むことができ、本当に良かったと思います。

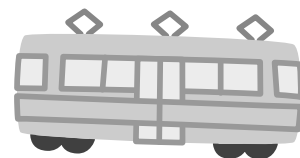
今尾恵介 著

## 「路面電車 - 未来都市交通への提言 - 」 を読んで

2 M 浅川 志郎

路面電車こそ21世紀にふさわしい都市交通機関であり、これに勝るものなし。やや誇張した表現だがこの本にはそう書いている。今や環境社会。地球温暖化などが叫ばれ、環境を壊した人間が遅いながらもようやくその修復に目を向け始めている。そんななかで路面電車の内に秘めた可能性を生かすことで、路面電車が21世紀にふさわしい乗り物であることを述べている。

日本で路面電車といえば、過去の物という認識がある。以前に見た写真がそれを象徴している。東京の都電、車の大洪水の中に電車があり身動きがとれない。車は電車に邪魔だといわんばかりである。後になって本当に邪魔だという理由で都電のほとんどが廃止になった。本によると欧州でも同様だったようだ。しかし、そこでは路面電車がよく利用されている。復活さえした都市もある。ここでは路面電車が車に邪魔だと言い返し車を排除してしまった。欧米でも日本と同様、戦後に車が増え、渋滞が起こり打開策として多数のバイパスを造った。しかし、皮肉にもそのバイパスが新たな需要を喚起して渋滞はそのまま。日本だとならばとさらに新たな道路を造り続けて無意味な道路を増やしたと思う。



しかし、欧米はここからが違った。コストが安く輸送力がそこそこある路面電車に注目し、これの優先をうたい、意図的に市街地での道路交通を

不便にした。これだけでは行政の押しつけなので、路面電車を便利にした。安い運賃、定時性、他の交通機関とのスムーズな乗り換えなど。道路を造ることこそ交通の全てだと思える日本では絶対に出来なかったことだと思う。たとえ路面電車優先思想が生まれても、交通を管理・運営する機関がバラバラだからどこかで不便が残っていると思う。利用者の立場に徹した欧州はすばらしく、これをきっかけに路面電車が道路主義の日本でも見直されたのだから画期的なことだと思う。

これを読むと日本がなさげなく感じた。常に欧米のまねごとをしている。戦後は、自動車が急速に発達して道路があちこちに造られた。欧米ではすでにこのことが10、20年前に起こっていてそのときは車の排ガスと道路建設による森林伐採で公害に苦しんでいた。そして路面電車が見直され、今元気に走っている。日本はようやく路面電車が見直され既存の路線をどう活用するか思案している。欧州からは30年遅れている。なぜ日本はこの間道路主義を貫いたのだろうか疑問に思う。平地はわずかでその平地に人々がひしめき合うように生活するため地価が高い。道路を大量に造るのに向いた国土とは思えないのは明らかだ。どこかで行き詰まるのは目に見えていて事実今そうなっている。そうなる前になぜ発想の転換が出来なかったのか。それともそうするとはじめは反発をくらうのが怖かったのか。それともそんな風に考えたこともなかったのか。この視点から日本を見ると日本が情けなくなる。

しかし、そんな日本でも路面電車の見直しが始まっているのだから、やる以上は便利で魅力ある物にしてもらいたい。



俵万智（たわら・まち） 著

## 「チョコレート革命」を読んで

25 大西 恵弓

何か心に残る詩や短歌の本が読みたいと思い、サラダ記念日で有名な俵万智さんのチョコレート革命を選んだ。題名のチョコレート革命というのはどういう意味なんだろうとずっと考えていたが、あとがきを読んでやっとわかった。“男ではなくて大人の返事する君にチョコレート革命起こす”という一首からのことばであり恋愛に大人の返事、つまり自分を守る為の方便や相手を傷つけないためのあいまいさをした君に、甘く辛い反旗をひるがえす。この甘く辛い反旗をチョコレート革命だと。チョコレートなら誰も知っているし食べた事もあうだろうから、何となく感覚的につかめるだろう。身近で、意外なことばにおきかえる事のできた作者がとても素晴らしく感じた。

この一冊には大量の首が載っていたがそのうちの多くが恋愛のうた、それも不倫など辛い恋のうただった。私はもちろん不倫なんてした事がない。けれどまるで私自身味わった事があるかのような、とても切なくやりきれない気持ちになった。その中から私が気に入ったものをかいてみる。

“簡潔に君が足りぬと思う夜 愛とか時間とかではなくて”

“もう二度と来ないと思う君の部屋

腐らせないでねミルク、玉ねぎ”

“家族にはアルバムがあるということの

だからなんなのと言えない重み”

とても辛くて寂しくて……そんな恋愛やめてしまえと私は思う。けれどやめられないほど相手を想っている事が痛いほどわかる。これが実際に作者が体験してきたものなのかわからないが、もしそうなのだしたら幸せになってほしい。幸せとはどのように、どうやって、などまったく考えつかないが、もっと心が安らぐ幸せを得てほしいと私は思った。

うたの多さからも恋のうたに目がいくけれども、中にはおもしろいものや物の見方を考えさしてくれるようなものもあった。例えば、

“まぼろしの讃岐うどんの特集で

テレビ画面に映るまぼろし”  
“リセットという羨しき機能もつゲーム

靴に下げて少女らは行く”

前者は私も思った事がありとても共感できた。後者では、私は少女等と同じでリセットボタンのあるゲームを持ち歩いているゆえに、ただただ便利と考えていたリセットボタンに全てをなかつた事にするという悲しい面もある事に気付いた。他にも作者と考えが重なり共感できるもの、作者によって批判や感激される側の立場となるものなどたくさん首があった。俵万智さんのうたはそのように何かしらの立場となって、まるでひとつの短いドラマの中に自分も出演しているかのような、うまく言い表せられないけれど、とても身近に感じる事ができ読んでみて本当に楽しめた。皆が皆共感できるものではないかもしれないが、まだ読んだ事のない人にはぜひ知ってもらいたい一冊だ。

最後に一首。これは17歳の若者の詩を作者が反歌にしたものだが、私が一番好きなものだ。

“ただ鳥が空を飛ぶように

ただぼくは17歳であることを飛ぶ”

ひたすら元気がでた、気分がすっきりした。こんなうたに出会えてよかった。

スペンサー・ジョンソン 著

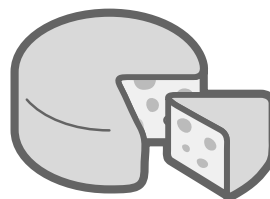
## 「チーズはどこへ消えた？」を読んで

2 I 小西 郁江

私が、この本を読もうと思ったきっかけは、新聞を読んでいて、今とても話題の本だと知ったからです。そして、この本を読んでみて私は、なんだか気分が明るくなった気がしました。こんなにも、社会が混沌としている現代に生活していて、自分がどこへ進んでいけばいいのかわからなくて、ふわふわと流れている中で、これから先、進んでいくための一つの道しるべみたいなものを、指し示してくれたと思います。

この本の中には、ねずみが二匹と小人が二人登場します。ねずみは単純、小人は複雑な考えの象徴として、そしてその中にも二匹と二人には、ちょっとした性格の違いがあります。それによ

て、探し求めているチーズをいかに早く見つけるか、どんなに大きなチーズを見つけたかが異なってきます。読んでいるうちに、ああ、自分はこの考え方に近いなあと思ってきて、とても共感できることや学ばされることがあります。その中で、生きていく中での教訓のようなものがいくつか出てきて、私が一番、心に強く感じたのは、「従来どおりの考え方をしているは新しいチーズはみつからない。」というものです。



そういえば私も、一度定着してしまった考えや、昔こうすれば成功した、ということに固執してしまっていて、そうしていれば安心だと思いこんで、なかなか新しいことには、挑戦できずにいることがよくありました。新しい考え、新しいものを試してみることは、誰でも恐くて勇気のいるものです。その先に何かあるのか見えなくて、自分がどうなってしまうのかわからなくて、どうしても新しいことを懸念してしまうのです。それは、人間一人のことだけに言えることではなく、いろいろな会社や組織にも十分に言えることだと思います。不況だと言われる中で、従来どおりのやり方から会社全体が、その中の人それぞれが新しい挑戦をしなければ、世間の状況に負けてしまうのではないかと思います。新しいことを行う不安に負けずにやってみると、きっとその先には少しでも進んだ結果が待っているのではないかと私は思います。

その他には、「変化を楽しもう」という教訓です。子供の頃は、いろいろなことをしていつもワクワクしていた気がします。それがどうなるのか、見ているだけで楽しくて、新しいことに恐れなんてなかったんだろうなあ、後ろを振り返るよりも前に進むことに夢中だった気がします。そう、あの頃の気持ちを少しでも思い出せたら「変化を楽しむ」ということがきっとできると私は思います。

変化した後の自分を思い描いてみて、なんだかうれしい気持ちになる。そんなことはだれにだってあることではないでしょうか？その気持ちをバネにして新しいことに挑戦すること。それが、今、現代の人には必要なことだと思います。そうすれば、きっとその先には新しい自分が待っているのではないのでしょうか。

星野 富弘 著

## 「愛、深き淵より」を読んで

2 C 大山 恵奈

黒い土に根を張り

どぶ水を吸って

なぜきれいに咲けるのだろう

私は大勢の人の愛の中にいて

なぜみにくいことばかり

考えるのだろう

私はこの詩が好きだ。

始めて彼の絵と詩を見たのは、小学校の頃、家にカレンダーが掛かっていた。きれいな花の絵と独特な文字が印象的だった。私はすぐに、彼の絵と詩が気に入った。彼の名前は星野富弘。彼の著書を母が持っていると知っていたけれど、ずっと読まないでいた。母が、彼は首から下が動かないのに、この絵や文字を口に筆をくわえてかいていると教えてくれたからだ。私の性格が曲がっているのか、そういった「こんなにツライ事があったのに、多くの人に支えられ、自分は前向きに生きて…」といった本があまり好きではなかった。どうしても、そんなにキラキラしているわけがないと思ってしまうのだ。だから、読む気になれなかった。しかし、この夏、再び母に薦められて読んでみることにした。この何年かの間に障害を持つ人々へ関心もできたし、他に読みたい本もないし、そんな気持ちで読み始めた。

星野氏は、元々すごく元気で生徒から人気もある体育教師だった。器械体操と登山がすきだった。まだ、教師になって2ヶ月、器械体操の模範演技で首の骨を折ってしまった。それからかれは、9年もの間、病院で生活することになる。母や姉、山仲間を支えられて彼は奇跡的に生き延びた。そ

して、口でペンをくわえて文字を書き始め、花の絵を描くようになっていった。いつしか、彼の絵と詩は多くの人に愛されるようになった。しかしそれでもみにくいことを考えた。最初の詩のように。彼は、本当に多くの人の愛の中にいる。家族、友達、生徒、彼の絵と詩を愛する人々、そしてイエス・キリスト。でも彼は病院で隣りのベットの人が退院するとき、心から喜ぶことができなかったのだ。なんて人間くさい。人間というのは、そういうものなんだと思う。だけど私は、彼をみにくい人間だと決して思わない。本当にみにくい人間というのは、あの詩のように自分がみにくいことを考えてしまうことに、悲しみを感ぜない人間だと思うからだ。みにくいことを考えてしまうのは、人間らしくて良いと、私は思う。そして今、彼は退院して自宅で絵と詩をかき続けている。身体は不治のままだが、結婚し、きっと人間くさくキラキラした希望の中で生きていくだろう。

この本を読むことに抵抗を感じていた私だったが、読み終わった今、もっと早く読んでいても良かったと思った。素直に多くの人の深い愛に感動した。彼の本は、私が抵抗を感じる「そういう本」とは違っていった。星野氏が、本を読む前より好きになった。



## 「英英辞典を利用していますか」

機械工学科 和田 任 弘

「心に残る1冊の本」の原稿を依頼された時、よく本を読むので快諾させていただいた。しかし、読む本は時代小説がもっぱら多い、というより最近では時代小説以外の本を読んだことがない。

以前は、「少年H」(妹尾河童氏)、「窓ぎわのトットちゃん」(黒柳徹子氏)など話題になった本もよく読んでいたが、今はもっぱら時代小説である。時代小説を読み始めたきっかけは、テレビドラマ「仮面の忍者 赤影」(昭和42年)の影響も少しはあると思うが、それ以上に、NHKの連続大河ドラマ「太閤記」(昭和40年)、「春の坂道」(昭和46年)、「国盗り物語」(昭和48年)などの時代劇を見ていて、戦国時代から江戸の幕末にかけて活躍した人物に興味を持ったためである。学生の頃には、剣豪の里「柳生」、関ヶ原古戦場、函館・五稜郭など史跡・旧跡巡りを楽しんだ。その後、駅の待合室や列車の中など暇なときには、「八代将軍吉宗」、「新書太閤記」などの時代小説をよく読むようになった。その影響か、今も、書店に入ると、真っ先に時代小説に目がいく。むろん、いずれの本も私にとっては「心に残る1冊の本」であるが、「図書館だより」の原稿となると、やや違和感がある。

そこで、何かの機会に「心に残る1冊の時代小説」のタイトルで書くことにする。

さて、今(1月下旬)ごろ、専攻科第2学年の多くの学生諸君は、「専攻科特別研究概要集」(平成12年度～)と「専攻科特別研究論文」の作成に取り組んでいる。「専攻科特別研究概要集」はA4用紙2ページで、「専攻科特別研究論文」のA4用紙20ページ程度に比べ、ページ数ははるかに少ない。しかし、「専攻科特別研究概要集」には、最大200語の英文によるアブストラクト(論文摘要)が課せられている。そこで、英文アブストラクトを作成することになるが、「英語独特」の表現などもあって、すぐにアブストラクトを作成できない場合もあるかもしれない。もちろん、授業で習得した知識などをフルに活用しながら、英和辞典、和英辞典、専門用語集などを利用してアブストラクトを作成したとしても...である。ここで、学生の皆様に利用をすすめたいものの一つに「英英辞典」がある。英英辞典は、調べたい単語が英語で説明されている。また、その単語に関連した語や同義語が同じ箇所に記載されているため、調べたい単語と関連した単語も同時に知ることができる。もちろん英和・和英辞典と同様、例文がたくさん載っている英英辞典も多く市販されている。この1冊「英英辞典」が、英文を書くときなかなか重宝する。

参考までに、市販されている英英辞典の一例(これ以外にも、多くの英英辞典が市販されている)は、

ロングマン現代英英辞典、ロングマン/桐原書店(4000円弱)

オックスフォード現代英英辞典、A.S.ホーニビ- / 開拓社(4000円弱)

などがある。

図書館にも英英辞典があるので、学生の皆様も大いに活用されてはいかがでしょうか。

# 学生の広場

こんな本、どう？

## 「パーネ・アモーレ イタリア語通訳奮闘記」

田丸公美子（文藝春秋）  
1 E 中山 裕宇喜

イタリア語通訳をしている人が書いたエッセイですが、そういった仕事に興味が無くても楽しめる内容だと思います。（多分）まじめな話ではなくてすごく読みやすいし、作者や、本の中に出てくる人々の考え方や行動なんかがとてもおもしろくておもしろいので、よかったら、息抜き？にでも。友人の米原万里さん（こちらはロシア語通訳）の「不実な美女が貞淑な醜女（ブス）か」

（徳間書店、新潮文庫）

「魔女の1ダース」（読売新聞社、新潮文庫）  
なんかも結構おもしろいと思う。

もしかしたらどの本も学校の図書館に置いていないかもしれません（多分その可能性の方が高い）。

## 晏子（上・中・下三巻）

宮城谷昌光（新潮社）  
1 I 中野 晃司

時代は春秋戦国、地は中国。この話の主人公、「晏弱」、その息子「晏嬰」の二人の偉人の過去の功績について書かれた、俗にいう歴史物。

晏弱の戦の中でも、第二巻の萊都の決戦で行った戦は特に印象的だ。兵士ではなく、工作兵が戦の要となって萊都を陥落させるという奇抜な戦術は彼の信念さえ感じられる。

ちょっと、一言

## 図書館の利用法について

4 S 柴原 誠

僕が図書館を利用する時は、参考書を借りたい時です。専門の参考書はとても高価であり、買うのをためらってしまいます。そんな時に図書館で本を借りています。

ここにはたくさんの有名な本があり、とても役立ちますが、ただ貸出期間が少し短いと思います。小説などの文庫は2週間までよいと思いますが、参考書はもう少し長くしてもらいたいものです。

又、レポートなどで調べたい時にも利用するのですが、この時にも困ったことがあります。それは詳しく載っている本が一冊しかないのです、他の

誰かが借りてしまうと調べることができないことです。ぜひ、2冊以上同じ本を置いてほしいです。

それぞれ人によって利用法が違い、不満や希望があると思うので、アンケートなどを取って、よりよい図書館になればいいと思います。

## 私と読書

3 E ズーン

人によって興味が違うということはだれでも分かっているでしょう。私は読書が好きでも嫌いでもない。レポート、試験のために本を読む時間以外は、体を運動させるスポーツをやりたい。そう思っている人もいますよ。

ところが、図書館で、参考書を探している時に、たまに面白そうな本を見かけ、興味がそそられ、借りることもある。それはときどき短編小説だったり、あるいは青春対話だったり、たまには日経サイエンスだったりする。そして、夜寝る前に開いて読んでみる。これらの本の中には読んだ瞬間眠ってしまい、読みかけたままで図書館に返却する本もあるし、読めば読むほど最後まで読みたい本もある。これを見てみると自分の好みのジャンルが分かるので、読み終えたら次回また同じジャンルを借りる。（どちらも自分に得だね。眠れるあるいは楽しむ）。これがいつの間にか、自分の習慣になり、レポートのないときにも、本を探しに図書館に行くようになった。

さて、私は小説、科学の雑誌、心理学の書籍など、いろんな種類を読んだことがあるが、短編小説が一番好きだ。長編小説は見るだけでもいやな気持ちになってくるので、めったに手を触れない。短編小説では自分が共感するものによく出会う。

一つの例をあげよう。事故で障害者になった人の話を読んで強い印象を受け、その人がかわいそうと思って、自分が存在している社会に対して自分の責任を意識するようになった。このように、一冊を読み終えるたびに自分が少しずつ変わっていく気ようながする。

私は皆さんとはもちろん比べられないが、日本語について一言。私は日本語の本を読むのはかなり遅いし、本の内容がある程度分かるが、深い意味合いは分かりづらいところが多い。だから、読めるジャンルが限られている。読みたくてもしょうがない。日本語が国語である皆さんの中にはめったに図書館に行かない人が結構多いでしょ。その人に対して私もつたいないと言う感じがする。図書館には本がたくさんあるので、皆さんの興味をそそるものが見つかるはずだ。できれば、私がやったような方法を一度試してほしい。

## ブックハンティングに参加してみた

1 S 大井 勇人

僕は11月22日に啓林堂で行われたブックハンティングに参加しました。

これはクラスの意見を聞いて図書館に置いて欲しい本を購入する企画なのですがクラスの意見がなかったため、僕が勝手に本を選ぶことになりました。しかし、これは僕にとってとても有意義なものでした。僕の場合は資格の取り方や参考書などを読みたかったので何冊か選ばしてもらいました。実際に欲しい本を吟味して買う事も(本当の目的とはまた違いますが)大きなメリットだと思います。

自分の読みたい本を買うお金を節約しつつ、本を図書館に置いてもらえるのはこの企画しかないので積極的に活用して欲しいと思います。

今回のブック・ハンティングでは次のような本を購入してきました。皆さんに気に入ってもらえれば嬉しいです。

- ・プリズンホテル 浅田次郎 / 集英社
  - ・天声美語 美輪明宏 / 講談社
  - ・ドリームバスタ 宮部みゆき / 徳間書店
  - ・花腐し 松浦寿輝 / 講談社
  - ・声に出して読みたい日本語 斉藤 孝 / 草思社
  - ・相手を思いのままに「心理操作」できる！ 三笠書房
  - ・こんな美しい夜明け 加藤 剛 / 岩波書店
  - ・センセイの鞆 川上弘美 / 平凡社
  - ・理解されない国ニッポン 別技篤彦 / 祥伝社
  - ・インストール 綿矢りさ / 河出書房新社
  - ・小川未明童話集 新潮社
  - ・ちょっとビターなチョコレート菓子 NHK 出版
  - ・ロシア語入門 (CD 付) 明日香出版など
  - ・最後の家族 村上 龍 / 幻冬舎
  - ・紅茶の事典 おいしく飲むための 成美堂
  - ・理解しやすい政治・経済 文英堂
  - ・まるごと覚える気象予報士試験 新星出版社
- 他にもたくさんあります。

## 最近の書棚から

### 「アド・バード」

椎名 誠 著

電気工学科 寺西 大

SFの1ジャンルとして、サイバー・パンクというのがある。映画「ブレードランナー」「MATRIX」あるいは「フィフス・エレメント」などに見られる、じめじめしてかなり猥雑な都市社会を舞台に繰り広げられる物語がそうである。小説では「JM」の原作となったウィリアム・ギブソンやブルース・スターリングなどがサイバー・パンクの大御所だが、日本にも意外なサイバー・パンク作家がいる。椎名誠である。

椎名誠というと、「岳物語」や彼のエッセイなどのイメージが強かったので、この本もSFはSFでもファンタジックなものだろうという先入観で読みはじめたが、なかなかどうして、どっしりした世界観に基づくハードなサイバーパンクであった。

タイトルの「アド・バード」とは、「アドバタイジング・バード」、つまり企業広告を行うためだけに人為的に改造された鳥を指している。改造生物による広告を展開する企業と、自動機械や機械化人間による広告を行う企業は、ライバル社の広告生物を破壊する機械や、広告機械を補食する生物の生産競争を始め、やがて広告生物対広告機械の「広告戦争」が勃発する。その結果、社会システムは崩壊し、世界は企業広告のために改造された異常生物や自動機械が徘徊する「腐敗都市」となる。

物語は、腐敗都市辺境のとある町で、主人公の兄弟が連れ去られた父親を探して町を出るところから始まる。兄弟は父の居場所の手がかりを求め、種々の異常生物との戦闘、様々な人と出会い、別れつつ、広告戦争の発端となった企業本社のある、かつての中心都市「マザーK市」を目指す。

SFではあるが、「酸出し」、「ワナナキ」や「インドカネタタキ」などの異常生物の命名、またその生態の描写などの随所に椎名誠テイストが存分に窺える。この原稿を書くに当たり、資料あさりと再度この本を手にとったが、独特の世界観についつい引き込まれてしばらく読んでしまう。ご大層なメッセージこそないが、意外な「椎名ワールド」にどっぷり浸れる読み応えのある一冊である。この世界観は、他の作品に受け継がれ、「みるなの木」や「武装島田倉庫」という、本書の外伝的な位置づけの作品もある。

# DVD であの名画をもう一度...

視聴覚コーナーにDVDプレーヤーが、新しく二台設置されましたので全てのブースで、ビデオ、LD、DVDが鑑賞できるようになりました。これに伴い今後DVDのソフトも順次充実させていきますので、余暇などを利用して鑑賞して下さい。

(現在鑑賞できるDVDソフトは次の通りです)

猿の惑星、13days、交渉人、理由なき反抗、トップ・ガン、モンタナの風に抱かれて、エリザベス、エマ、タンゴ・レッスン、マトリックス、ファニーとアレキサンデル、スター・ウォーズ、ソフィーの世界、クリスマス・キャロル、ナショナル・ジオグラフィック全23巻、プロジェクトX第2期10巻



## 編集後記

読書感想文なんてなければ、もっと楽しく本を読むことができるのに、と考えている人はたくさんいるでしょう。でも長い夏休み感想文を綴ることによって自分を成長させた人たちがここにいます。楽しむ読書・考える読書を結実させ、立派な感想文で本誌を飾ってくれた皆さん、おめでとう。

読書は私たちの言葉、感性、情緒、表現力、創造力を啓発します。そしてなにより、自分自身を発見することができます。自分自身を見つめることすなわち自分探しにほかならないと入賞候補作品を読ませていただきながら、つくづくそう感じました。

お忙しい中原稿をお寄せ下さった先生方そして学生の皆さんありがとうございました。

(図書館委員会)

奈良工業高等専門学校図書館 〒639-1080 大和郡山市矢田町22 TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp/>